

[制作記録]

インタラクティブインスタレーションの制作2

伊藤英高

ある日私は、テレビの紀行番組で不思議な光景を見た。チベットの寺院で、人々が大きな筒のような物を回転させている。それは、寺院の建物に何本も組み込まれており、高さは1メートル以上あったであろう。子供も老人も歩きながら、何気なく片手でぐるぐると回転させているその筒は、摩尼車（まにぐるま）というもので、これを一回転するごとに、筒に巻かれた経文を読んだ事になるというのである。

宗教といえば苦行という言葉を連想するが、長い経文を読むこと無く、気軽にがらがらと回すその様子は、「面倒なことを手軽に済ましてしまおう、しかし希望だけは叶って欲しい」という、人間のものぐさな姿に見えた。しかし、それ以上に、あつけらかんとした素直な人間の本质が見てとれたのである。

そしてそれは、コンピュータの操作における“ショートカット”を連想させる。ショートカットとは、頻繁に行う作業をキーボードのキー操作に割り当て、瞬時に実行させてしまう“近道”の操作法である。人間は、強い願いを叶えたいという時でも、近道があればそちらを通らない理由は無く、そして道がなければ、無理矢理にでも近道を作ってしまうのである。近道は横着であるが、創造でもある。

2006年10月、スペイン、バルセロナにおけるグループ展「SHAIHENS」で、作品「経箱」を発表した。中古の抽選器（通称ガラポン）を加工し、回転のスピードにコンピュータが反応するようにプログラミングした。鑑賞者が取手を回転させると、それに合わせて人間の声が語り出すのである。一定のスピードで回転させると、ある程度言葉は聞き取れるが、内容を理解するのは難しい。

コンピュータが語り出す内容は般若心経である。これは通常日本で読まれるものではなく、古代サン

スクリット語をそのまま英訳したもので、より原典に近い意味合いが含まれる。鑑賞者は抽選器を回しながら、気付かないうちに苦も無くありがたい経文を耳にすることになる。

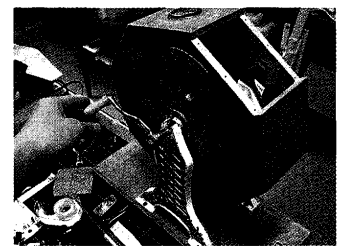
横着して“近道”する人間、その果てに携帯電話、インターネットなどのテクノロジーが存在しているのである。苦行の先に見える悟りも捨てがたいが、究極の手軽さの向こうには新しい感覚が待ち受けている。

チベットの摩尼車には、川の水の力や、風力で回るものまであるそうである。人間の手を離れ、自然の力で空中に漂う言葉。その言葉は、人間の意思・欲望を超え、時間さえも超えた、宇宙的な存在を夢想させる。

(いとう・ひでたか 共通造形センター／映像メディア)



鑑賞者は取手を回転させる。そのスピードに合わせて経文を読み上げる声に変化する。



中古の抽選器の内部を改造、回転のスピードが無線でコンピュータに伝わる。

「経箱」(2006) 抽選器、コンピュータ、音響機器 他